

## くつき 朽木朝日の森での フィールド実験

主任学芸員（森林生態学）  
草加 伸吾



琵琶湖西北部に流入する安曇川の流域に、朝日の森があります。そこで数年前から、森の木を切ると下流の川や湖にどんな影響が出るかを調べる実験を行っています。同地域には昔から薪炭林として利用され、その後放棄されたクリ・コナラの二次林が広がっています。

ここに尾根と谷で囲まれた小さな流域を二つ選び、流れ出る水を比べながら、片方を伐採し、栄養塩など湖の汚れの元になる物質が増えるか減るかといったことを調べます。伐採前と伐採後、数年にわたり、大雨時や

普段、定期的に調べ、森林地の健康診断をするわけです。

この実験から、木を全部切ると、吸収されなくなった窒素分が最初のうちは濃度で十数倍～400倍、大雨時に量で約40倍も出てくること、6年経った今でもまだ元に戻っていないことがわかってきました。しかし同時に、斜面の上部と中下部では出方が違い、下部からの濃度が最も高いことも明らかになってきました。これらの研究を生かして、森林の環境調節機能を維持し、富栄養化物質の少しで

も出にくい木の切り方、森の管理の仕方を探し、提案していきたいと考えています。

◀伐採後植林されてかなり大きく育った5年目のスギ林。写真上部に見えるのはもとのクリ、コナラ林



田植えが近づき、田んぼに水が入ると間もなくエビたちが出現します。なんで「田んぼの生きもの」なの？ 滋賀県には大型鯉脚類と呼ばれる3つのグループに7種類のエビ類がいますが、田んぼに水のある中干しまでの短期間、それぞれの役割を果たしながら生きる小さなバイタリティーに共感できるからでもあります。

琵琶湖博物館でグループ調査をするうち、ほとんどの種で滋賀県北部の生息確認が少なかったことがわかってきました。そのナゾ解明に安曇川以北の今津町方面を主に調査をしています。

昨年11月3日に三田市の「兵庫県立人と自然の博物館」で開催された「ボランテア・メッセ2002」に参加出展しました。ここでの目的の



ひとつは、滋賀県内に留まらない生息分布を調査したいということもありました。また、会場で生きたエビを見てもらおうと試みた孵化の初挑戦には失敗しましたが、博物館の先生はカイエビの孵化に見事成功されました。そのカイエビを水槽に入れると元氣よく泳ぎまわり、たくさんの人に見ていただいて大好評でした。田んぼのエビを知らない人も、田んぼを傷めな

## 田んぼのエビを探しています

田んぼの生きもの調査グループ 古谷 善彦

## 交流ノート

C展示室は「湖の環境と人びとの暮らし」を展示テーマとしています。今回はC展示室における来館者と展示交流員さんとの交流の様子をのぞいてみました。

C展示室での来館者との交流が活発なコーナーはどこですか？

昭和30年代の民家を再現した「富江家」の外にはカワヤがあります。ここには生き



富江家のカワヤ

たコイもいるのですが、昔なつかしい洗濯機が小さなお子さんを連れた若いお母さんたちに意外と人気があります。

このカワヤでは今と昔の水の使い方の違いでいろいろなお話ができるのです。

生きたコイと言えばプランクトンを見られるコーナーもありましたね。

毎朝、琵琶湖から旬の(?)プランクトンを採取してきています。交流員のなかにはプランクトン博士といえるような人材も育てています。子どもさんだけでなく大人の方でもミジンコ談議で盛り上がります。



プランクトンを見る

水の味調べというユニークな展示ではどのようなお話がされているのですか？

「水の味調べ」のコーナーでは、我こそはグルメの舌を持っていると自負されている来館者の方々が挑戦されるの



水の味調べ

ですが、結果は十人十色。でも、お国自慢ならぬお水自慢がどこの地方でもあるようで、日本は水に恵まれた国であるということに来館者の方々から教えていただけるのも楽しみです。